

中屋健弑先生のことなど

第4期（1956年卒業） 島村 力

「アルバイトはやめろ。就職は安心しろ」——初めてアメリカ科の部屋でお会いした時、先生が強調されました。当時、受験生相手の通信添削、模擬試験、受験雑誌『 $\alpha\beta$ 』の出版、サンデースクールなどをやっていた、東大文化指導会というアルバイト団体にのめり込んでいた私にはショックでした。でも、結局は二足のわらじを履きつづける結果になりました。

先生は授業開始の五、六分前に教室に着席されていました。教壇には時計が置かれていた記憶があります。ある朝、授業開始の後、ガラガラとドアが開く音がして、学生が入ってきました。すると、先生は黒板拭きをドアに向かって投げつけました。学生に命中したかどうかは定かではありませんが、彼はびっくりして出て行きました。寮生ではなかったか、スリッパか草履の音が耳に残っています。怖い先生だ、という印象でした。

「アメリカ科はスパルタ授業だって」——経済学部に行った文一の時の友人がどこかで噂をききつけて来たようです。たしかにアメリカ史の講義は当時としては画期的で、シラバスという知的工程表に従っての講義はいささか機械的な印象を受けましたが、週三〇頁ほどの原書アサイメントとそのサマリー提出、順番に内容の発表など厳しいものでした。でも、「負けるものか」と頑張りました。成績はレポート（週一回と期末）の出来、出欠の度合いなどの集積ですから、明々白々です。でも、おかげで洋書速読のテクニックを磨き、社会に出てから大きな武器になったのは確かです。

私は中央公論に入社して、念願の雑誌編集者になりました。後で知ったのですが、入社にあたっては、先生の推挙があったのです。四〇歳の時に社を辞して、フリー・ライターの世界に飛び込みました。ある日、「お前、遊んでいるのか」と先生から電話がありました。『知識』（休刊）という総合雑誌の編集が下手だから、「手伝え」という命令です。バイト気分で編集に参加し、ライターとして「地方実力時代に行く」で全国を回り、「ロールスロイスに乗った松尾芭蕉」で奥の細道紀行を果たしました。

その頃、先生は定年後、京都外国語大学でアメリカ研究の講座を持っていました。ある時、「お前、教壇に立たないか」という連絡を受けました。京都外大での先生の講座を引きついで欲しいということです。ライターの生活の不安定を慮ってくれたと思います。その後、二〇年間、新幹線で京都に通うことになったのです。アメリカ研究ゼミのほかに、大教室で「世界文学論」「日本文学論」という講義を行いました。今、思えば汗顔の至りですが、これも教養学科で得たフロンティア精神のおかげです。中屋先生は小生の人生の節目を用意してくださったと感謝しています。おかげで長年、アメリカ研究者の末席をけがすことができました。

当時、教養学科では学生の数より講座の数が多く、下手すると受講生ゼロという講座も出かねないほどの恵まれた環境でした。したがって、そのようなことがないように学生の方で受講調整をしたように覚えています。「島村は文学好きだから」というわけで、鍋島能弘先生の「エドガー・アラン・ポー特講」を受けました。一対一の講義ですから、休むわけにも

いかず、今日は雪が降っているから休講と多寡をくくっていたら、先生から招集の電話がかかって来て、浅草から東京西郊の御自宅に伺ったことがあります。お昼ごはんを戴いた後、じっくり鍛えられました。先生と共訳でトルーマン・カポーティ『草の豎琴』を在学中に出版することになったのも懐かしい思いです。

今も変わりはないと思いますが、他の科の講義を聴くことができましたから、フランス科の前田陽一先生のフランス語学、ドイツ科のドイツ人先生の講読、ゲーテの『ヘルマン・ウント・ドロテア』などを教室の片隅で聞いて悦に入っていました。あの頃、歸米直後の佐伯彰一先生、内田忠夫先生には新時代を感じました。佐伯先生の英語での講義は新鮮でしたし、まだマルクス経済学が幅を利かしていた時代に、内田先生の近代経済学、なかならず計量経済学の講義も新鮮でした。

ここに一枚の写真があります。

斎藤真先生と四期のみんなと戸田の寮に遠出した時のものです。前列左端が小生です。卒業後、四期の諸君と一堂に会することはありませんでした。

海外勤務で世界中に散らばっていたからかもしれません。ところが教養学科の四期の人達が分科を越えて長年、半年ごとに会っている会があります。

「教養学科有志懇談会」がそれです。



この会の淵源は国際関係論分科の村野ゼミ（国際経済）に遡ります。卒業後も有志が先生を中心に国際経済に関する討論を行っていました。ところが数年後、参加者が減って中断しました。この集まりが懇談会として出発したのが昭和四七年（一九七二年）頃です。私が参加したのが、一九八五年ですが、友が友を呼び、国際関係論、イギリス、フランス分科、アメリカ各分科の四期生が集まり、多い時は十九名でした。戸田の写真に写っている四期生は、この懇談会にかわるがわる出席していました。残念ながら、亡くなった方もいますが、今年（二〇一五年は）も十一月に東京青山のNHK青山荘で教養学科有志懇談会が行われ、八三、四歳の同期の諸君の元気な姿に接しました。成田正路、丸山秀治、菅原信一の諸兄です。幸いにも懇談会のおかげで同期の友人にあえるのですが、最初から幹事役をつとめている藤井長生兄(国際関係論)に心から感謝しています。